

## 水棲の恋人

はじまり

それは、巨大な柱を想わせる水槽だった。柱にはせん状に硝子の階段が組まれ、その階段を日焼けした、屈強な海の男たちが上っていく。

水影を観客席に落とすその水槽の中には、一体の人魚が泳いでいる。

人魚は薄い衣をまとい、観客である男たちを誘惑するかのように青い目で流し目を送っている。人魚の胸は平坦で、一目見て男だとわかる。だが、その体軀はしなやかで女のそれを想わせ、触れると柔らかさすら感じられるのではと観る者に想わせた。

水の中で人魚が揺蕩う。月を想わせる金糸の髪は月光を浴びて、七色に輝き、そして尾びれは白い真珠のような煌めきに包まれていた。

面白いことに、人魚は脚を持っている。その脚にもまた、尾びれと同じ真珠のきらめきを持つ鱗が生えていた。

柱を想わせる水槽の上部から、次々と男たちが水の中へと飛び降りていく。その男たちと熱い抱擁を交わしながら、人魚は男たちと接吻を交わす。そして、優美に尾びれを揺らしながら、煌めくその脚を開け、男たちに誘惑の目差しを送るのだ。

その目差しに惹きつけられるように、一人の男が人魚に抱きついた。そして、彼と何度も接吻を交わし、舌を絡み合わせる。

熱い接吻を交わしながら、二人は水中でくると回転し、体を密着させる。そのまま二人は下半身を深く突き合わせていた。

水の中で、男の勃起したそれが人魚の下半身へと滑り込んでいった。人魚は整った顔を歪ませ、青い目に涙を浮かべながら、それを受け入れていくのだ。人魚の目に涙が溜まり、それは気泡のような水滴となって揺れる水面へと吸い込まれていく。

男が腰を激しく動かす。

人魚もまた、男の動きに合わせて腰を浮かせる。二人は水中でお互いに繋がり、激しくお互いを求めているのだ。

その光景を、観客席から啞然と見つめていた男がいた。

長身で、筋肉質な体軀にオリブの肌を纏ったその男は、深紅の髪と切れ長の赤い目をしていた。その目が怒りに歪む。

男の名はオリオン。

水槽の中で男たちに犯される人魚の、恋人だった人物だ。

人魚の名はキベレ。

海賊に攫われ、その身を性奴隷の身分へと墮とされた憐れな存在だ。

二人は、十年ぶりにこうして再会した。

恋人を略奪された男と、性奴隷となった人魚として。

## 見世物小屋の人魚

遠い南西諸島の美しき海に、人魚たちの住む集落がある。

彼らは水棲人と呼ばれ、水に潜ると鱗や尾びれを持つ人魚に変化することができる種族だ。

その起源は古く、劣等種であるヘルマフロディトスの末裔として、彼らはこの世に生を受けた。

太古の昔、女性が生まれなくなった世において、人類は劣等種族であるヘルマフロディトスを生み出し、女性の代わりに彼らに子を生ませた。  
ヘルマフロディトスから再び女性が生まれ、人類が再興して幾年月。

今や劣等種族のヘルマフロディトスは様々な場所に定着し、その土地の民として日々を生きている。

美しい南西諸島の海には、様々な極彩色の珊瑚が連なる。

その珊瑚の合間を、美しい色とりどりの魚たちが泳ぐのだ。

赤、青、そして黄。

そんな魚たちとともに海を泳ぎ、群魚の先にいる大きな魚を追う男がいた。

腰まである赤い髪は水流によってうねり、鋭い切れ長の目は目的の魚に向けられている。

男の名はオリオン。

漁師であり、近くの岸边にある水棲人の集落の長でもある。

彼の手には銚が握られており、その銚を彼は思いっきり魚めがけて突き刺した。

魚の腹が銚に貫かれ、魚はばくばくと口を動かしながら透明な気泡を吐き出していく。その気泡を見つめながら、男は魚を貫く銚を手元に手繰り寄せていた。銚を片手に、オリオンは太陽によって白く輝く海上を目指す。揺れる水面を突き破ると、そこには青い空がどこまでも続いていた。

真珠のように白く輝く太陽を見て、オリオンは目を細める。

彼の脳裏に、揺蕩う真珠色の尾びれが浮かび上がる。その尾びれを従える人物は、この空のように美しい青い目をしていた。

オリオンの脳裏で、真珠色の幼い人魚が金糸の髪を揺らしながら微笑む。

「キベレ……」

愛しい人魚の名を呼び、オリオンは悲しげに赤い目を歪めていた。

キベレはオリオンの最愛の人だ。

そんな彼が海賊にかどわかされてから、もう十年の年月が経とうとしていた。

「オリオン！ オリオン！」

海に揺蕩うオリオンを呼ぶ声がある。

オリオンがそちらへと体を回すと、小舟に乗った屈強な体軀の男がオリオンをじっと見つめていた。男の深刻そうな顔をみて、オリオンは目を鋭く細めた。

「なにがあつた？」

「また、子供たちがかどわかれた。あいつだ！ ヘリオスが自分たちへの貢物だと言って、無理やり……」

男の目からほろほろと涙が零れる。

「あの男が、ここに来たと……」

オリオンは驚きに目を見開く。その目は怒りに彩られ、鋭く赤い光を放つ。

男は、涙をぬぐいオリオンに告げた。

「俺のところの息子もやられた！ あいつ、俺にこう言ったんだ。礼として、いいものを見せてやる！ 長であるお前もつれて来いって……」

「なんだって……」

怒りに彩られていたオリオンの目が、再び驚愕に見開かれる。

「キベレだ。あいつ、キベレを連れて戻って来た」

その言葉に、オリオンは打ちのめされたような表情を浮かべるのだった。

十年前、キベレは海賊の長とも言われているヘリオスにかどわかれた。

真珠のように美しい鱗を持つキベレは、先祖がえりを起こした個体だったからだ。それゆえに、彼は男でありながら妊娠することが可能だった。

先祖がえりを起こした水棲人は、海の向こうにいる神々には選ばれた神聖な存在とされ、神官になることが定められている。

そして、キベレの夫となる者は、集落の長になることが定められていた。

オリオンは、キベレに見初められ彼の夫となるはずだった。

だが、二人が夫婦となった直後、海賊であるヘリオスが集落を襲い多くの子供たちと共にキベレを攫っていったのだ。

キベレの美しさが、ヘリオスを惑わせた人々は噂し合った。

それほどまでに幼かったキベレの美しさは際立っていたのだ。そしてそれから十年。キベレの行方は全く分からず、オリオンは愛しい人を見つけ出すことすらできなかった。

それどころか、海賊たちに荒らされた集落を立て直すので精一杯だったのだ。愛しいひとを取り戻すどころか、彼は愛しいひとを探すことすら許されなかったのだ。

鍾乳石が連なる洞窟の奥は多くの篝火によって明るく照らされている。海賊たちが漕ぐ船に乗りオリオンは、その洞窟の奥へと向かっていた。

オリオンの周囲には、水棲人を乗せた海賊たちの小舟が浮かんでいる。

子供たちを差し出すと嘘をついたところ、あちらがたいそう喜んで自分たちをアジトへと案内してくれたのだ。

洞窟は船が進むほどに狭くなっていき、海は小さな川のような流れをとるようになっていた。松明に照らされる乳白色の鍾乳石を見つめながら、オリオンはこの奥にいてあろうキベレに想いを馳せる。

オリオンの前で、ヘリオスは囁いながら泣き叫ぶキベレを犯した。そして、オリオンに囁いたのだ。

——こいつは、もう俺のモノだ……。

回想をやめ、オリオンは權を漕ぐ前方の海賊を見つめる。

浅黒く日焼けした海賊は、屈強な体軀をしており、長身で体の大きなオリオンでもかなうか分からない相手だ。それほどまでに、この界限に潜む海賊たちは強者がそろっている。

そんな荒くれ者たちを、キベレを攫ったヘリオスは率いているのだ。小さな集落の長であるオリオンが叶う相手ではない。

それを知ってか、海賊たちはオリオンを見て嗤いながら言った。いいものが見られると。

どう考えても、それはキベレのことを指している。彼らにとって、自分より格下だと思っているものを貶めるのは、なによりの愉悦だからだ。

そしてそれを考えると、キベレの現在はかなり悲惨なものであると察せられた。

「ほら、俺たちのアジトが見えてくるぞ」

そう權を漕ぐ海賊が告げる。前方へとオリオンが顔を向けると、そこには信じられないものがあつた。

「あれは……」

それは、巨大な錆びた鉄の塊だつた。

いや、鉄の塊といつても、それは船の形をしているように見える。とてつもなく大きく、まるで山のように洞窟の奥にある岩礁に鎮座している。

「鯨の様だろう。まあ、お前たちの暮らすこの海域に、これほど大きい鯨がいるわけがないがな！」

がはははと海賊が嗤う。

その嗤いに呼応するように、集落の水棲人を乗せた小舟からどつと笑いが巻き起こつた。

「なにがおかしい……」

静かな怒りがオリオンの中に満ちていた。

彼の低い声に、海賊はぎょっとした様相になる。そして、にやりと厭らしい笑みを浮かべたのだ。

「俺たちにとって、お前らは小魚みたいにくろりと食われる存在だってことだよ。ほら、あいつみたいにな……」

そっと海賊が指さす先を見て、オリオンは目を見開いた。

巨大な円柱の水槽が、鉄の船の横にあった。それでも水槽の大きさは鉄の船の十分の一ほどだ。

そして、その円柱の水槽を取り囲むように、木製の観客席がすり鉢状に設置されている。その観客席には男たちが座り、水槽の中を夢中になって見つめていた。

その水槽の中にいるものを見て、オリオンは驚愕した。

人魚が水槽の中にいたのだ。

美しい金系の髪に、海を想させる青い目。そして、真珠の輝きを想起させる鱗を纏った人魚。

それは美しく成長したキベレその人だった。

小舟から降りたオリオンは海賊たちに急かされ、円柱の水槽の周囲に張り巡らされた木製の観客席に座らされていた。

キベレは美しい金系の髪を水の中で揺蕩わせ、真珠のように鱗に覆われた脚を揺らしている。そして、妖艶な青い目で観客席にいる男たちに蠱惑的な目差しを送っているのだ。

キベレは全裸だった。そして、その胸は平らで彼が男であることを示している。その水の中で、彼は自身の立ち上がったものにそっと手を添えたのだった。



水槽の硝子には長い珊瑚でできた横棒のような突起がいくつかついている。その突起に体を纏わりつかせ、キベレは大胆にも両脚を広げて、己の男根を手で擦りだした。キベレは頬を赤らめ、切なそうな目差しで観客たちを見つめている。

キベレが腰を動かし、体を突起に纏わりつかせる。それは、淫らな水中のダンスだった。

キベレは自身のものを慰めながら、その様子を観客たちに見せつけているのだ。キベレの手の中で、男根は見る見るうちに膨らみ、立ちあがっていく。キベレの男根からは透明な汁が溢れ、それが雫となって水面へと上がっていく。それを見つめる観客席の男たちから、どよめきあがった。

「さあ、今日も美しい水棲人との逢瀬を楽しめるよ！ お代はこちらまで！」

海賊たちが、そんな男たちの周囲を練り歩き、彼らに金銭を求めてくる。男たちはこの近隣で通貨として使用されている美しい装飾員を海賊たちに渡していくのだ。

「さあ、お代を支払った方々は、こちらへ！ 我らの人魚がお待ちかねだ！」

男たちは海賊たちに促され、階段と通路を伝ってすり鉢状の会場の下へと向かって行く。円形の水槽には螺旋階段がとりつけられており、その螺旋階段から男たちは水槽の上部へと歩いていくのだ。

もちろん、彼らの目的はキベレと交わること。

そして、厳しい目つきでそれらを見つめていたオリオンの元にも、海賊の一人がやってきた。

その海賊にオリオンは話しかける。

「あの人魚はいくらなんだ？」

「今回は真珠貝十枚でどうだ！ 昨日より安くなってるよ！」

海賊の言葉に、オリオンは鋭く目を細めていた。びくりと海賊はそんなオリオンを見て、体を震わせる。

「旦那。怒ってる？」

「いや、なんでもない……」

オリオンは、腰から提げた巾着から貝を何枚か取り出し海賊に渡していた。「まいどあり！」と海賊はその貝を受け取って、オリオンについてくるよう促す。オリオンは海賊の後について、観客席から通路へと移動する。

「ウチの人魚は男のアレで貫かれるのが好きですからねえ……。せいぜい、可愛がってやってくださいな」

下卑た笑いと共に、観客席から水槽の前へとやってきた男はオリオンに水槽の上部へと続く階段を指し示した。

階段はらせん状になっており、男たちが列をなして水槽の上部へと上がっていく。螺旋階段を上がり切った男は水槽へと飛び込み、淫らなダンスを踊るキベレの元へと泳いでいく。

キベレは彼らに誘惑の目差しを送り、男はキベレを抱きしめるのだ。男の手は、キベレの脚の間へと消えていく。

ごぼりとキベレが切なそうな顔をして、気泡を吐き出す。男の五指はキベレの脚の間を弄り、その最奥にある窄みを弄んでいた。

男が指を動かすたびに、キベレは体を小刻みに震わせる。そして、いきり立った男根から、キベレは白い精を吐き出した。それは、白い靄となって水の中に溶けていく。

男はそんなキベレを抱き寄せ、自身のいきり立ったものをキベレの窄みへと挿入していく。キベレは青い目を歪ませ、その男根を受け入れていくのだ。

男はキベレの華奢な体をしっかりと抱きとめ、何度も腰を激しく降る。キベレもまた、男の動きに合わせて下半身を動かす。そうしているうちに、キベレの表情は恍惚としたものとなり、屹立した男根から透明な液体を垂れ流す。それは、水を濁しながら水面へと上がっていく。

男に犯されながら、キベレは発情していた。彼は夢中になって、何度も何度も腰を振るう。そして、男もまたキベレの動きに合わせて激しく下半身を動かしていた。

キベレの体が小刻みに震える。そして、男とキベレの結合部分から白い白濁とした液が溢れ、水を濁していくのだ。

